

巴金——連帯の理想に生きた知識人

山口守著
巴金とアナキズム
理想主義の光と影



A5判 490頁
中国文庫
[本体 9,000円 + 税]

近藤 光雄

二〇一一年春頃、当時まだ大学院生だった筆者は、年末の巴金国際シンポジウムに向けて論文の準備を進めていた。この時に選んだテーマは「巴金はいかにサッコロヴァンゼッティ事件に関心を寄せたか」というもので、関連資料を蒐集し始めると、早速山口守氏の諸論考に辿り着いた。このテーマに関する研究は中国国内ではほとんどなされておらず、氏の論考がもつとも先駆的かつ総合的なものであった。あわせて巴金（一九〇四―二〇〇五）とヴァンゼッティ（Baroldomeo Vanzetti 一八八八―一九二七）との間で交わされた書簡も翻刻紹介されていたため、論考とともに参考にさせていただいた。とはいえ、当時は氏の問題関心とその広がりをおまじりに留めていなかっただため、本書を通読して漸くそれを理解した次第である。

「巴金とサッコロヴァンゼッティ事件」に関する諸論考は、本書第一章第二節に収録されている。この事件は、「赤狩り」旋風が吹き荒れる一九二〇年代、アメリカはマサチューセッツ州で発生した現金強奪殺人事件を契機に誤認逮捕・処刑された二人のイタリア系アナキストに対する迫害事件である。アナキズムを信奉していた巴金は、フランスに留学した一九二七年に事件を知り両氏の救援活動に加わったが、彼はこの当時、実践活動に挺身する間もなく中国アナキズム運動の挫折を経験し、多くのアナキストが国民党に擦り寄り右傾化するありさまを目の当たりにして、失意のどん底にあった。そのような孤独、憂愁、苦悩を払拭し巴金を勇気づけたのはヴァンゼッティとの文通であり、己の死を超えた希望と理想を巴金に実感させ、自己と世界を繋ぐ絆を気づかせたものこ

そ、ヴァンゼッテイの言葉であったという。同じ頃、巴金はロシア系ユダヤ人のアナキスト、エマ・ゴールドマン (Emma Goldman 一八六九—一九四〇)とも文通しており、共産主義勢力が台頭しアナキストが右傾化するなか、中国アナキストがいかに自主性を確保しつつ中国革命を展望し、世界のアナキズム運動と連帯を図るかという問題に強い関心を示した(同章第一節)。巴金がこの時期に発表した政論の多くはアメリカのアナキズム雑誌『平等』(The Equality)に掲載されている。この雑誌の創刊者である劉忠士 (Ray Jones 一八九二—一九七九)は、一九〇九年にアメリカに渡った華人労働者で、人種や言語、民族や国家の違いを超えてアナキズムによる連帯に生きた人物である。劉のトランスナショナルな立場が彼と巴金を結びつけることとなり、巴金を編集者に迎えた『平等』は、中国アナキズム運動の枠を超えて広くアナキズムを宣伝する、世界性志向の性質を持っていた(同章第三節)。このような自己と世界を繋ぐ絆を追い求める巴金の姿勢は以降も変わることなく貫かれていると氏は指摘する。例えば、一九三〇年代半ば頃、巴金は唯一の原則に基づく統一体の構築を目指す統一戦線を拒否し、各人や各集団が自主性や固有の信念を保持し協力する連合戦線を唱え、これを抗日戦争における主要原理に据えた。そして、同時期に展開され

た対ファシズム戦争としてのスペイン革命における労働者や農民による自治や自主管理を、抗日戦争における革命実践と重ね合わせて評価した。また、スペイン革命のなかで活躍したアナキストとその思想に対して、巴金はフランス留学中から注目していたが、彼らに寄せた共感は一九三〇年代初期から閩粵一帯で教育に携わる中国アナキストの自主管理的な実践活動に対する敬意と連動しているという(同章第四節)。巴金におけるアナキストとしての連帯意識は、抗日戦争におけるナシヨナリズムの高揚や後の共産主義政権の成立に隠れて読み取りにくいところはあるが、その展開と特徴は、巴金が一九五〇年代頃まで欧米アナキストと交わした往復書簡に表れている(同章第五節)。

氏がかくも巴金の書簡を重視するのは、公表を目的としない個人的な手紙を含め、それが公刊された著作と同様に、巴金の思想の固有性や連続性を探る一つの手掛かりであると考えたからである。手紙のやり取りとそこに綴られた言葉は、アナキストとしての巴金、即ち Li Pu Kan (李芾甘)を表現するものであるとともに、作家としての巴金を生み出すものでもあったという。例えば、巴金のデビュー作『滅亡』(一九二九年)は、当初はフランス留学中に感じた孤独や苦悩に駆られて断片的に書かれていたが、ヴァンゼッテイと書簡を交わし

た後には、理想のために身を捧げるといふヴァンゼッティの自己犠牲の精神が作品の主軸に据えられ、作中人物に投影されるに至った（第一章第二節）。このようなアナキズム運動や思想への関心と文学創作の実践との相互関係を、氏は第一章のタイトル通り「アナキズムと文学の往復」と呼んでいるが、本書では「文学」なるものを小説に限定することなく散文や書簡にまでその範囲を押し広げて、そこから自己と世界を繋ぐ絆やアナキストとしての批判精神を捉えようとしている。第三章「日本経験」によれば、巴金は一九二〇年代半ば頃、大杉栄（一八八五—一九三三）暗殺後に追悼文を発表し年譜をまとめ、古田大次郎（一九〇〇—一九二五）の獄中記『死の懺悔』（一九二六年）に深い感銘を受けるなど、日本のアナキストに対して強い連帯意識を持っていた。そこから生まれた日本への関心に突き動かされ、巴金は一九三四年に日本を訪れるが、彼に下宿を提供した中国語教員の武田武雄（一九〇三—一九八六）をモデルに小説「神・鬼」（一九三五年）を書き、武田が政治や家庭の圧力から逃避し日蓮宗に入信したことを批判した。そして、日中戦争が始まると、巴金はやがて通訳官として大陸に出征することになる武田に宛てた公開書簡のなかで、戦争を支持する日本の一般大衆に抗議する意志を表明した（同章第一・二節）。また同じ頃、社会主義者山川均

（一八八〇—一九五八）は短文「支那軍の鬼畜性」（一九三七年）のなかで、日本の傀儡政権「冀東防共自治政府」を防衛する中国人部隊が日本の特務機関や警察の各施設を襲撃した通州事件（一九三七年）を批判したが、巴金は山川にも公開書簡を宛て、侵略戦争に抗し得ず帝国主義に屈する姿勢に抗議した。巴金は、日本の侵略戦争と連動した日本の知識人の言動によって自身の連帯意識を裏切られながらも、それを批判しつつ彼らが悔い改め本来の正義を自覚し取り戻すことに期待を寄せていた。そして、それによって実現されるはずの自由と平等を、日本や中国といった個別の区域に止まらない、人類全体の課題として広く捉えていたという（同章第三節）。

氏はまた、正義や道徳といった高尚な精神を追い求め人類の解放を目指すという、巴金における理想主義を、一九二〇年末頃から建国前夜に至るまでに発表された小説にも見出しており、時系列に沿ってその表れ方や表現手法の違いを三つのグループに分類し考察している。それによれば、一つ目のグループに含まれる作品は、主に一九二〇年末頃から一九三〇年代初期までに書かれた「恋愛と革命」をテーマとするものである。巴金はこれらの作品のなかで、理想を掲げて現実と格闘し苦悩する青年たちの姿を描いているが、自身の思想と感情を過度に注ぎ込んでいるため、自立した作品世

界を構築することができなかった。二つ目のグループに含まれる作品は、主に一九三〇年代初期から末期にかけて書かれたもので、封建的な家族制度を描いた代表作『家』（一九三三年）に象徴されるように、作者自身の実体験に基づいており、ある程度のリアリティを備え時代や社会と結びついている。しかし、作中に描かれる体験は題材のレベルにとどまっており、巴金の創作態度も以前のそれとほぼ変わらない。三つ目のグループに含まれる一九四〇年代の作品では、それまでの創作方法が克服され、一人称の叙述者が外部から作品世界を観察するという、相対化を図る表現手法が取り入れられている。また、抗日戦争下の市井の人々の暮らしを題材とするこの時期の小説には人間性がリアルに表現されているが、それは、日常生活のなかで形成された巴金の生活意識と作家のヒューマニズムとの融合によるものである。その最終到達点に位置づけられる小説『寒夜』（一九四七年）は、人間の自我、自由、エゴイズム、絆といった問題を捉える作品として完成したという（第二章第一節）。氏はさらに、巴金の理想主義を理解する試みとして、二つ目のグループに属する小説『家』の構造をも明らかにしている。氏の指摘によれば、巴金は恋愛問題を契機とする覚慧らの若い世代と高老太爺らの古い世代との対立関係を組み立て、かつ財産をめぐる同一世代内部の対立

関係を描く一方、「血」や「性」といった「家」を形作る実質的要素を主題から排除し、「親子」や「夫婦」における対立関係を取り上げなかった。その結果、「家」の構造は平板化し作中の人物像も図式化されるが、「家」の枠組みを明示しそこから儒教的秩序のみを抽出することで、巴金は人間を図式的な世界に閉じ込める封建的な「家」を批判し、それが必然的に崩壊するとこの信念を読者に伝えたという。覚慧が鳴鳳の死後に個人における恋愛問題の解決を放棄し、封建的秩序の破壊に重きを置き家出するというストイックな生き方にも、理想主義に貫かれた巴金の思想が表れている（同章第三節）。

人物像のリアリティの喪失や単純化と引き換えに社会批判や理想主義を前面に押し出すという、『家』に対する氏の分析は、本書のなかではもつとも示唆に富む内容の一つと言える。筆者もまた、思想そのもの持つ観念性が先行した結果、人間性や人間の内面をゆがめてしまうという点に関心があるが、そのような人間理解の限界が巴金のほかの小説においてどのように処理されているか、さらに議論する余地がある。氏の今後の研究に引き続き注目したい。

（こんどう・みつお 神田外語大学）